

スポーツ実践における「観察」 —観察社会学による身体教育のフィールドワーク—

Fly like a butterfly, sting like a bee,
you can't hit what you can't see.

『スポーツ・ビジョン』（スポーツビジョン・研究会 1991）に
引用されているモハメド・アリの言葉である。

岡 田 光 弘

目次

はじめに

1. テニス指導における実践的な問題
2. スポーツビジョンのパラダイム
3. 知覚の様相と知覚動詞
4. 実際のスポーツ指導における知覚動詞

おわりに

はじめに

社会学研究者としての筆者は、エスノメソドロジー研究の紹介者、実践者として、これまでいくつかの本や論文を邦訳し、その成果を観察社会学として再定式化しつつある (cf. Huchinson., Read & Sharrock 2008)。さらに経験的な研究を実践

し、大学で教えてきた。また著者は、これと同時に、大学体育の教員として、おもに、テニス、卓球といったラケットスポーツを教えてきた。

社会学者として専門としている観察社会学の目的は、多様な社会現象について、社会学の既存の理論によって「説明」を与えることではなく、人びとによる、さまざまな方法を用いた実践を明確化することである。そして、身体教育者として常日頃考えているのは、たとえば、「テニス・卓球に適した知覚理論はあるのだろうか」「それをどのように使えば、指導の役に立つのだろうか」といったことである。近年、観察社会学の研究史、研究動向を概観し、その理解が深まっていく中で、テニス指導の実践で使用されている概念を観察社会学の手法で解明し、自らの行なっている身体教育の実践を明確化することができるのではないかと、そして、それが実際の身体教育の指導の役に立つのではないかと考えるようになってきた。もしそれが可能なら、一挙両得であり、ハイブリッド・サイエンスとしての観察社会学の有効性を示すことになるのではないだろうか。本研究ノートは、こうした動機に基づいて、実際のテニス指導の実践を対象に、観察社会学を行なう試みである。

1. テニス指導における実践的な問題

球技をプレイするには、移動しボールを打つために、ボールの軌道を見るという課題がある。ボールの軌道は、物理的には、ほぼ、打球時に決定される。打球時（ボールとラケットの衝突時）のラケットの速度と方向性（ベクトル）とストリングの摩擦係数とによって（厳密には、それ以外には気圧や風向きによって）、決定されることになる。

ボールの軌道には、上昇、第1頂点、下降、第1バウンド、上昇、第2頂点、下降、第2バウンドといった規範的な表象の仕方がある。さらに、軌道を見る方法が複数ある。軌道が見えていることは、適切に打球するための前提であるので、ボールの軌道が見えるようになることは、テニス指導における重要な課題である。しかし、これを、たんに命題的な知識としてではなく、実践と結びついた身体的な知識として、どのように教えるかは、テニス指導における実践的な課題となる。

2. スポーツビジョンのパラダイム

次のような記述は、スポーツビジョン、あるいは通常の知覚心理学の立場を表しているように思われる。

「ボールが止まって見える」。これは、プロ野球で、“打撃の神様”と謳^{うた}われた川上哲治さんが、絶好調時に残したとされる有名な言葉です。本当にそんなことがあるのだろうか、と問われて、三冠王を3回取った落合博満さんは、こう答えたそうです。「さあ、どうかな。ただ、オレはボールの縫い目ならはつきり見えるよ」(石垣 2009:14)

同じく、落合選手による「見る」ことについての逸話だが、「投球を目で追っていくのではなく、投手のモーションから投げてくるボールの軌道までをひとつの景色として見ていくことだった。」(落合 2003:38)。あるいは、「カーブを投げるときだけ、グッと左肩が上がった。鋭く。」(落合 2003:39)といった記述には、ゲシュタルトや時間的な要素が含まれている。

見る(特に、ボールを眼で追う)ということに関して、対立的な立場がある。たとえば、DVD教材である『We Come to the Zone』において、フォードは、ボールを見る見方として、パラレルモード・プロセス(PMP)という認知の理論を提示する。打点に視線を固定して、飛んでくるボールは眼で追わずに、周辺視野で認知するという方法である。これに対して、『フィーリング・テニス』での戸村は、徹底的にボールを眼で追うことを推奨する立場である。大脳生理学によってたつとするこの立場については、知覚の理論なのか、「集中力」の養成法なのか、という疑問がある。だがここでは、方法の提示として、いくつかの概念について吟味したい。

3. 知覚の様式と知覚動詞

社会学としてのエスノメソドロジー研究は、近年、会話分析と概念分析の社会学という領域で、多大な研究成果を上げている。だが、元々、エスノメソドロジー

研究は、ハイブリッド・サイエンスとして、現場での実践に基づき、人々が用いている方法（エスノ・メソッド）を明らかにするも研究手法だった。テニスをする人々に特有の知覚の方法というものはあるはずである。そこで具体的な作業に入る前にまず、一般的に、知覚の様相と知覚動詞について概説してみよう。

観察社会学（エスノメソドロロジー研究）の特徴

Coulter らによれば、「エスノメソドロロジー研究は、視覚についての指向を分析によって示してきた社会学の一分野である。エスノメソドロロジー研究の基本的な主張は、メンバーの言語使用の適応基準を活動との関係において歪曲することなく保ち、その条件下で、人間の活動を分析することだった。エスノメソドロロジー研究をそれ以外の諸研究とを区別するのは、まさにこの種の分析的な営みである。…筆者ら (Coulter & Parsons) の考え方では、こうした研究の取り組み方を、視覚についての指向のカテゴリーにおけるメンバーのリソースの豊富さや複雑さに注目する分析の形式に形を変えるものと解釈する」(Coulter & Parsons 2000:260)。

たとえば、視覚指向には多様な動詞があり、「見る」はその多くの中の1つに過ぎない。Coulter らは言う。

視覚による知覚の動詞には、次のようなものがある。attending, beholding, browsing, catching sight of, checking out, discerning, discriminating, distinguishing, spying, examining, experiencing, eyeing, gazing (at, through, upon, around, in [to], up at), glancing (at, over, through, upon, around, into), glimpsing, having in sight, holding in view, inspecting, leering (at), looking (at, for, over, into, through, up, under, around), making out, noticing (that), observing (that, through), ogling, peeking, peeping, perceiving, perusing, picking up, poring over, recognizing (as, that, how), scanning, scrutinizing, searching (for), seeing (as, that, through, into), seeking (for), setting one's eyes on, sighting (as, that, through, into), skimming, spotting, spying (on), squinting, staring (at), studying, surveying, taking in, taking notice of, viewing, watching (for, over), witnessing, などなど

(Coulter & Parsons 2000:260)。

これら視覚指向の動詞の中には、特に「視覚」というわけではなく、ほかにも適用できるものもあるし、これ以外にも、「読む」、「書く」、「運転する」、「歩く」といったように、知覚の存在を前提にする動詞はたくさんある。また、こうした動詞の適用範囲を制限する文法基準がある。さらに、「視覚による知覚」と包括して言う場合、これらの視覚動詞のあいだにも容易にわかるはっきりとした区別がある。そのいくつかを示してみよう。私はXを見ていても (see)、認識してはいない (recognize)、私はXを探すが (look for)、見つめてはいない (look at)、私はじっと見ているわけではないが (stare at)、Xのほうに視線を投げている (watch)、私はXを調べているわけではないが (scrutinize)、Xを観察している (observe)、私はXを熟視してはいないが (pore over) Xを注視はしている (peruse)。私はXをYと見ているが (see X as Y)、Xは見えてはいない (see)、私はじっと見るともなしに (watch)、Xを見ている (see)、私は観察することなしに (observe)、Xをただじっと見つめている (gaze)。私はXを視界に捉えるが (catch sight of) Xを探しているわけではない (look for)、などである。

そこで明確になったことは、可能な範囲内において世界に対する人の視覚指向の特徴化は多様で捉えにくいということだ。日常的環境で普通に見られる人全体に対する「見ている」の適応性は、こうした区別を捉えてはいないだろう。慣習的な使い方のコンテキスト中の多くの視覚による知覚動詞が「見る」や「見ている」に属させることができるようになったとしても、人がすること、できることは「彼を見る」(see)、「彼を見つける」(spot)、「彼を注視する」(watch)、「彼をじっと見る」(scrutinize)、「彼に視線を注ぐ」(glance at)、「彼を見つめる」(look at)などのあいだの区別である。私たちは、「いいえ、私はあそこにいる彼をただ見ていたのじゃなく、観察していたんです」や、「あなたは私をただ漫然と見ていたのではなく、じろじろ見ていたわね」などと言う。たとえば、大声で読む、一人静かに読むどちらでもよいが、とにかく本を読むと考えてみよう。本のページを読んでいるうちに、あるいは読んでいるあいだ、「ページを見た」「ページの文字を見た」と言う、行為や視覚指向の属性としては正しくない感じがするだろう。彼が「ページを見た」(saw)というとき、その独自の環境に適切に関連がある、彼が「本を読んでいた」という言い回しと同一の広がりを持たない属性基準が必要

である。ページを読むとき、人はそのページを見ているのでもなければ、見ることに失敗しているのでもなく、まさに、ページを読むのである。「ページの文字を見る」も同様である。この活動（属性）は「ページの文字を読む」の対照となりえるもので、独自の属性を持つ。だが、ここでも「X…を読む」と同一の広がりを持たない属性である。ときとして、「包含」の関係という概念を多用することで混迷してしまうこともある。こうした動詞を使うことが、推定上「関連する」あるいは「包含する」ほかの動詞とは適切に関連していないことを意味していることもあるからである。誰かが第三者に、彼は「ページを見ていた」(looking at)と言うとしても、実際に彼はページを読んでいたのであり、従って「…を見る」(look at)という属性については削除できることになる。

「見る」や「見ている」が包括性をもつとする問題と同じほど重要なのが、人間の視覚指向の時間的要素である。

メンバーの活動の中でどの様式が引き合いに出されたり、表現されたり、前提とされたりしようとも、人の視覚指向時間的な関係性を見おとすということは、論理的な文法を侵すことである。ある人が何気なく慣習的に車で出勤するとき、中には関連性の上で何も描写されないこともあるが、多くの瞬間は1つないしそれ以上の視覚指向カテゴリーを使つてうまく描写される。例を挙げると、通りがかりの歩行人を一瞥する (glance at)、道にある障害物に気づく (notice)、縁石が最近壊されたと見てとる (see)、事故を目撃する (witness)、新型モデルの車を目にとめる (catch sight of)、友人を認識する (recognize)、パトカーを見つける (spot)、などがあるだろう。しかし、こうした事々をすることなしに（達成することなしに）ただ自分の車を運転している場合も、この人はまだ「周囲を見回している」(scanning)、「進行方向を見ている」(looking)、「自分の道を探している」(finding)など、抽象的に描写されるべきではない。

4. 実際のスポーツ指導における知覚動詞

エスノメソドロジー研究は、ハイブリッド・サイエンスとして、現場での実践に基づき、人々が用いている方法（エスノ・メソッド）を明らかにするものだった

た。ここからは、筆者の大学体育での身体教育の指導経験をもとに、テニスにおける知覚の様相と、知覚動詞を用いてはいないが知覚と関わって人々が使っている方法について、一つの事例を提示したい。

4-1 叩き台となる提案

テニスの試合をしているとき、どういった知覚の様相と、それに伴う知覚動詞が利用可能なのだろうか。あくまで、試論として列挙してみよう。

相手コートや会場の全体が一望できる。

サーバーは、集中力を高めるために、ボールを凝視する。

サーブする相手の様子を眺める。

どこにどういうボールを打つかを予見する。

相手が打つとき、トップスピン、スライスといった球種を識別する。

相手の打球を眼で追う。

相手のボールがアウトだと見切る。

打球のコースを認識する。

相手の打球の強さに目を見張る。

相手の打球が頂点に達したとき、ボールの長さを測る。

ネットを越えたとき、打球のコースを見定める。

バウンドしたとき、スピンを視認する。

打球する前には、打点の自処をつける。

自分と打点との距離を自測する。

相手の姿が目に入る。

打球する前には、相手の位置を確認する。

打球する前に、相手のボールの変化に気づく。

打球時には、ボールを注視する。

打球時には、打点に焦点を合わせる。

打球後は、打球の行方を追う。

このように、テニス（あるいは卓球やバドミントン）をプレイするとき、さまざまな知覚の様式が用いられている。それに伴う知覚動詞のそれぞれは、ある認知の過程を表していたり、視覚を資源とする達成を表していたりする。冒頭で、「you can't hit what you can't see」と記したように、実のところ、打球するということが可能なのは、ボールの認知が正確に行なわれているからである。認知を総称する言葉に「見る」を、打球を総称する言葉として「打つ」を採用するなら「打つためにはボールを見る必要がある」ということになる。

この点で、運動指導において、たびたび行われているように、ボールを「打つ」、「運ぶ」、あるいは「捉える」といった言葉を用いて、それぞれの効果を比較するといったとき、それぞれに特有の認知のモードが前提になっているということに気づくだろう。そして、観察社会学の知見に基づけば、身体教育における指導用語として、どの言葉を用いるかで、運動の成果が変わるといえるとき、その違いは、もともと言語使用が人びとの実践を導いているという意味で文法上の違いに基づくものなのである。

たとえば、「打つ」という言語使用では、ラケットコントロールといった、打球時までの運動調整の過程に強調点がおかれると言えるだろう。それに対して「運ぶ」では、打球の方向性を強く意識した、打球時の運動調整が強調される。たほう、「捉える」においては、打球の瞬間に焦点が合い、打球時の独特の感覚と、その感覚や時間意識の興行きに注意が向いていると言えそうである。

4-2 知覚から感情へ：「打ちたくなる」経験

あるレッスンDVDでは、見方には「見る—視る—観る」といった違いがあり、「見るは見学」のような見方で「観るは観察」のような見方であるという。そして、見る<視る<観る、の順で「注意力」が高まり、逆に視野は狭くなる、という解説がある、これら的大脑生理学に基づいているとされるが、根拠の出典はない。その学問的な正しさはともかく、こうした解説があることは意義がある。⁽¹⁾

さて、具体的な指導法の中に、知覚と関わるものがある。ボールをよく見ているとボールが「打ちたくなる」ところがある、というものである。打ちたいところで打つと「気持ちよく」打てるというものである。この「気持ちよさは」、

生理的な感覚であるところから、「打ちたくなる打点」を「生理的なヒットポイント」と呼んでいる。

しかし、この「生理的」という呼称は、いささかミスリーディングである。DVDにおいても、「ピットポイント」の過ちを指摘しているところからも、それが導かれる。「正しい／誤っている」というコードをもつことから、このヒットポイントは、「生理的」というより、情緒社会学でいうところの感情規則にもとづいた感情義務であり、「規範的」なものなのである。「打ちたい」という欲求は「打たない」という具体的な体験から、それとの対比で経験可能になっている。また、「打ちたい」と感じる空間上の位置は、打とうとしている球種や狙っている場所によっても変化する。それゆえ、(戸村『フィーリング・テニス』)で「生理的」と呼ばれているものは、本来なら、「状況に埋め込まれたヒットポイントと呼ばれるべきものであろう。

「打ちたくなる」という欲求、そして打たない時の気持の悪さとタイミングが良く打てたときの気持の良さという感情は、球技における感情体験の深層ルールに基づいたものであり、テニスというゲームのルールについての理解・認知に依存した「理解の時点での (Understanding onset) 感情であるようだ。先に述べたように、この感情は、「テニスの基本ルールに従い、ある打点で打つことが出来る、さらには良いボールを打つためにはそこを打点にするべきだ」という規範性を帯びたものである。

別のレッスンDVD (田中『実践直し』)にも、「打ちたくなってから2拍待つて打つ」というコツが、提示されていた。ここでの2拍には、テイクバックの慣性モーメントを極力小さくすることで、振り始めが遅くても大丈夫なように、すなわち、大きなテイクバックをしないように、という意味合いも込められていると思われる。しかし、このDVDにおいても「打ちたくなる」ポイントが存在し、それは実際の打点より、空間的に十分に「前」にあり、時間的に「先」にあるということ含意されているのは明らかであろう。

おわりに

テニス（や卓球）指導において、ボールをどう見るか、相手の様子をどう見るかという実践的な課題に対して、現時点においては、「叩き台」に示したように知覚の様相から答えるという教え方はなされていないように思う。自分は、クルターらの論文から、そういう指導法があり得るということを知ったが、そういった方法を用いることが効果的かどうかは自信がない。それは、「打ちたくなる」というやり方は、学習者の実感を伴う方法であるのに対して、知覚の要素はそれを教えられても、正否を実感することが難しいからである。打球技術の習得という点では、概念の分析に直接的な利用可能性がみられないかもしれない。

また、「打ちたくなる」について言うなら、この指導言語は、ある時点でボールが認知できたことで、バウンドを経て、位置が特定できるとか、頂点を經由して位置を特定できるという理解について、別の言い方をしたものだといえるかもしれない。すなわち、ある種の理解、「分かった」という感覚を「打ちたくなる」と呼んでいるかもしれないのである。

これまで見てきた知覚の様相についての知識は、打球法の指導という局面ではなく、むしろ、ゲームの指導のレベルにおいて、使えるかもしれない。いずれにせよ、本研究ノートの試みは、ハイブリッド・サイエンスとしてのエスノメソドロジー研究の可能性を探るものだった。メッセージ分析やコミュニケーション論を学ぶことは、生涯スポーツとしてテニスや卓球を学ぶこととも結びついているのだ。

註

- (1) まずこの解説が、知覚の様相を記述するものではなく、注意力が高まると視野が狭まるというように、線形的な説明になっているということである。

文献：

Baccus, Melinda 1986 Sociological Indication and the Visibility Criterion of Real World Social Theorizing. In Garfinkel, H. (ed.) Ethnomethodological Studies of Work. Pp.1-19. Routledge.

- Coulter, Jeff & E. D. Parsons. 2000 The Praxiology of Perception. *Inquiry*, 33: 251-72.
- Huchinson, Phil., R. Read & W. Sharrock. 2008 *There is No Such Thing As a Social Science*. Ashgate.
- 石垣尚男 2009 『眼力の鍛え方』 新潮社
- 内藤貴雄 1995 『眼で考えるスポーツ』 ベースボール・マガジン社
- 落合博満 2003 『落合博満の超野球学1』 ベースボール・マガジン社
- スポーツビジョン・研究会（編著）1991 『スポーツ・ビジョン』 ブックハウス HD

DVD

- ・ 戸村基貴 『Feeling Tennis ストローク編、サーブ編、スマッシュ編』 フィーリングテニス
- ・ JACOT 『コーディネーショントレーニング in スポーツ テニス』 有限会社ラウンドフラット
- ・ 田中 瞬間直し実践会 実践 DVD85 “元型” フォアハンド マスタープログラム Part1 (有) シンヤ・スポーツブレイン
- ・ Scott Ford Welcome to the Zone 株式会社 アダプティブデザイン